

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 篠原尚人

論文題目

小学生の対人関係イラショナル・ビリーフに関する研究
-不登校の予防を目指して-

論文審査担当者

主査	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	平石賢二
委員	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	中谷素之
委員	名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授	田附紘平

別紙 1-2

論文審査の結果の要旨

本論文では、小学生の不登校の背景にある重要な要因の1つとして挙げられている対人関係の問題を論理療法の中核概念であるイラショナル・ビリーフという観点から捉え、小学校における不登校予防教育プログラムの開発を目指して以下に述べる3つの質問紙調査研究および1つの実践研究を行っている。

本論文は5章から構成されている。各章の概要は以下の通りである。

第1章では、今日の日本の小学生が抱えている諸問題と小学校の現状に関するまとめ、これまでの不登校研究の用語の変遷、原因論、分類、学校での不登校予防教育等に関する研究の概観、小学生の対人関係および認知の発達的特徴のまとめ、国内外におけるイラショナル・ビリーフ研究の概観を行い、それらを踏まえた今後の研究課題と本研究の目的、構成について論じている。

第2章では、小学生の親、教師、友だちという異なる対人関係のイラショナル・ビリーフを測定するための心理尺度の開発を行った。研究1では、小学4年生から6年生までを対象にして、文章完成法形式の質問紙調査を実施し、親、教師、友だちの対人関係イラショナル・ビリーフ尺度として使用することができる項目の収集および内容の分類、選定を行った。研究2では、研究1で得られた項目を使用して尺度を作成し、尺度の信頼性と妥当性を検証するために、小学4年生から6年生までを対象にした質問紙調査を行った。調査では新たに作成した対人関係イラショナル・ビリーフ尺度と先行研究で開発された中学生用対人関係ビリーフ尺度が使用された。因子分析の結果、親、教師、友だちの対人関係イラショナル・ビリーフ尺度では、それぞれ3因子が抽出された。また、中学生用対人関係ビリーフ尺度の得点との相関係数は、対応する対人関係内ではすべて中程度以上の有意な正の相関が示され、一定の併存的妥当性が示唆された。また、各下位尺度の信頼性係数も十分に高く、内的整合性の高さも示された。

第3章では、研究3として、親、教師、友だちに対人関係イラショナル・ビリーフと自尊感情、ストレス反応、不登校傾向との関連を検証するための小学4年生から6年生までを対象にした質問紙調査を行った。相関分析と重回帰分析の結果、対人関係イラショナル・ビリーフと自尊感情、ストレス反応、不登校傾向との仮説を支持する有意な関連は限定的であり、逆に数値的には低いが一部の組み合わせにおいて仮説とは異なる方向での有意な関連が認められた。これらの結果を踏まえ、小学生の対人関係イラショナル・ビリーフ研究の今後の課題が論じられた。

第4章では、研究4として、友だちに対する対人関係イラショナル・ビリーフ（友だちへの気づかい）に焦点をあてたストレスマネジメント教育プログラムを小学5年生の学級集団に対して実施し、友だちへの気づかい、否定的自尊感情、不登校傾向の3つの変数に関して、プログラム実施前、実施後、フォローアップ（1ヶ月後）

論文審査の結果の要旨

の3時点での得点変化からプログラムの効果を検証する試みを行った。このプログラムは毎週1回合計3回実施されており、それぞれの回に設定された目標は、第1回が「ストレスサー、ストレス反応、ストレス対処法について知る」、第2回が「物事に対する受け止め方を修正するストレス対処法を身につける」、第3回が「日常生活でストレスとなっている出来事を思い出し、受け止め方を修正してみる」であった。3時点での3変数の得点変化を分散分析によって検討したところ、3変数すべてにおいて時点の主効果が有意であり、多重比較の結果、実施後と1ヶ月後の得点は実施前の得点よりも有意に低かった。これらの結果よりストレスマネジメント教育プログラムが友だちに対する対人関係イラショナル・ビリーフ、否定的自尊感情、不登校傾向の低減に効果がある可能性が示唆された。また、効果の持続性、発達段階に応じたプログラム開発の必要性、研究デザイン等に関する今後の課題についても論じられた。

第5章では、研究1から研究4までの成果のまとめと、不登校の要因を対人関係イラショナル・ビリーフで捉えることの意義、学校現場における不登校予防のあり方の検討、小学校での不登校予防教育のあり方の提言の3点について論じた。そして、最後に本研究における今後の課題として、尺度開発における構成概念妥当性の検討の必要性、イラショナル・ビリーフの中核とされる「当然である」、「ねばならない」、「すべき」といった言葉が付加されているにも関わらず、尺度得点の高さが仮説とは異なる結果を示していたことに対する疑問の解明、本研究で対象にしていない小学校低学年と中学年を対象にしたプログラム開発などが挙げられた。

本論文の特色と学術的意義としては以下の点が挙げられる。

- ① 論理療法の中心概念であるイラショナル・ビリーフ、特に対人関係に関するイラショナル・ビリーフを小学生に適用した研究は日本では全くみられず、本研究はその可能性を検証しようとする先駆的な取り組みとして位置づけられる。
- ② 本研究における児童の対人関係に関するイラショナル・ビリーフを測定する尺度の開発も日本においては初めての取り組みであり、引き続き尺度の修正や信頼性、妥当性の検討が必要ではあるが、今後の定量的な実証研究の継続と発展を可能にした点で他の研究者に与える影響も大きく、学術的意義があると言える。
- ③ 開発した心理尺度を使用した基礎的な定量的研究に留まらず、それを使用した心理教育プログラムの効果を検証する介入研究を行ったことも本研究の大きな特色である。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

以上の本論文の内容に対して、審査委員からは以下のような疑問点、問題点が指摘された。

- ① 対人関係イラショナル・ビリーフを改善することが何故小学生の不登校予防につながるのか、その介入の有効性に関する説明が不十分だったのではないか。
- ② 対人関係イラショナル・ビリーフ尺度開発における最初の項目収集の段階で、「～で気をつけていること」という刺激語を含んだ文章完成法形式の質問をしているが、何故、シンプルにイラショナル・ビリーフに関する回答を求めなかったのか。「気をつけていること」は目標のようなものも含まれており、イラショナル・ビリーフとは異なるものである可能性があるのではないか。
- ③ 対人関係イラショナル・ビリーフ尺度の回答形式は、「まったくない」「すこしある」「たくさんある」「非常にたくさんある」の4段階評定になっているが、肯定すればイラショナル・ビリーフであるとは言えないのではないか。規律や規範意識を反映している可能性もある。イラショナル・ビリーフとみなせる程度に、極端に得点の高い群とそうではない群との比較などの分析方法もあったのではないか。また、親、教師、友人という3種類の対人関係のあり方を関連づけた対人関係パターンの分析もできたのではないか。
- ④ 対人関係イラショナル・ビリーフに焦点をあてたストレスマネジメントの心理教育プログラムを実施しているが、ストレスマネジメントの方法を学ぶこととイラショナル・ビリーフの改善のつながりが分かりにくい。イラショナル・ビリーフそのものを改善することを目標とした心理教育プログラムもあるのではないか。
- ⑤ 論理療法は成人を対象にした心理療法として始まっているが、児童に適用する上での留意点は何か。

審査委員からのこれらの指摘に関しては、博士学位申請者は研究の限界や課題について十分に認識しており、質疑に対する回答も的確であり妥当なものであった。また、これらの課題は今後の研究によって対処していくことが可能であると判断した。

以上の結果を総合し、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。